

夏の見学会『江戸東京博物館』報告

日本麻酔科医会連合代表理事 武田 純三

7月25日（土）に夏の見学会『江戸東京博物館』を開催した。「親子で巡る」シリーズで始めた見学会は、本年度で4回目となる。

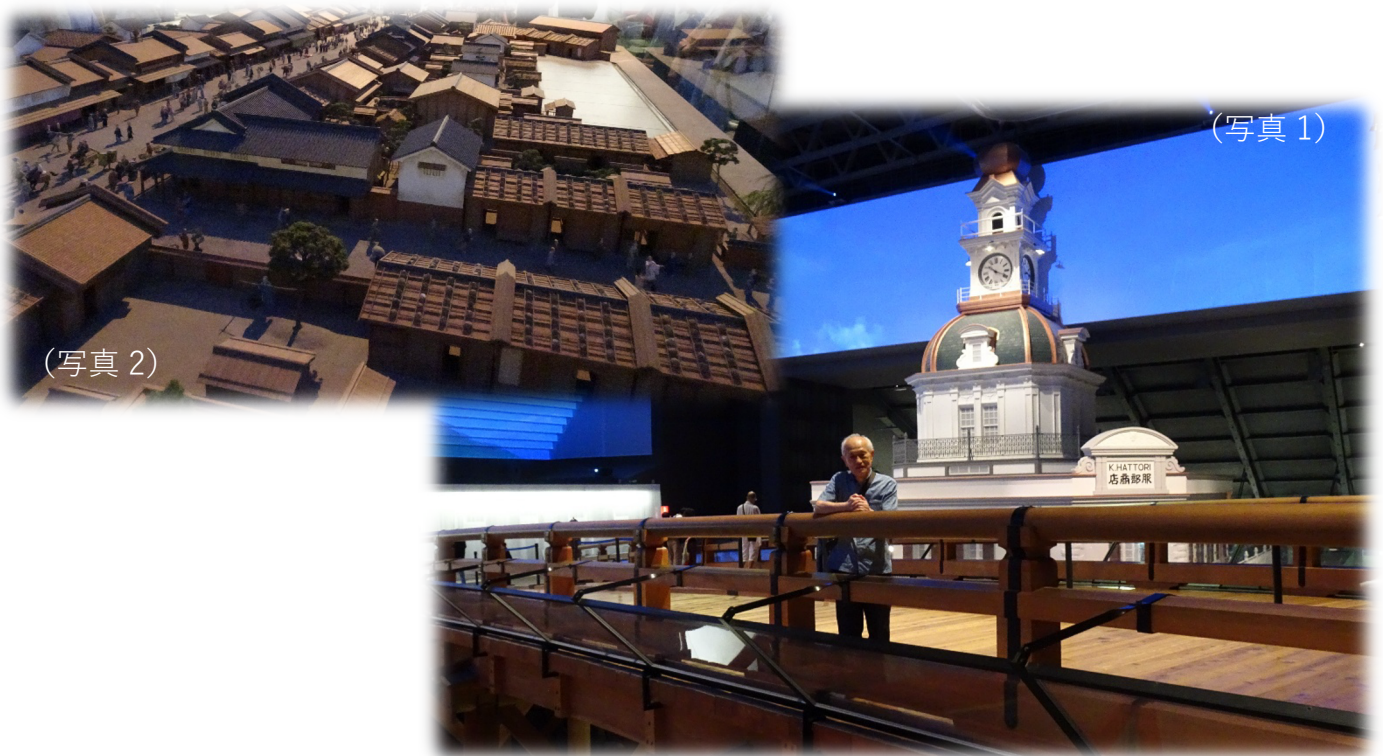
『江戸東京博物館』は、東京都が両国駅前の旧国鉄用地に建て、1993年3月に開館した。約30年が経過した2022年4月より大規模改修のため休館となり、2026年3月31日にリニューアルオープンしたばかりである。博物館のシンボルマーク（図1）は、浮世絵師の東洲斎写が描いた「市川鯉蔵の竹村定之進」（図2）の目をもとにデザインされている。



(図2)

一般展示と特別展示が行われており、一般展示場は6階で、江戸ゾーンと東京ゾーンに分かれていた。入口を入ると実物大の日本橋を渡り、江戸の町に入っていく（写真1）。江戸の町や江戸城のジオラマはかなり精巧に作られてお

り、ズーッと見ても飽きない（写真2）。



下に降りると実物大の長屋等が設置されており、当時の生活が展示されている。火消しが使った15kgの縄や26kgある肥桶があり、実際に持ち上げることができる。すし屋の屋台もあり、おにぎりほどの大きさのすしが並んでいた。

圧巻なのは芝居小屋「中村座」の再現で、華やかで、江戸東京博物館を象徴する一つとなっている（写真3）。



中村座の家紋
「角切銀杏」

（家紋画像）株式会社中村屋公式ホームページより転載 出典：株式会社中村屋公式

HP (<https://www.nakamuraya.co.jp/>) © 株式会社中村屋

東京ゾーンは、自分達の小さかった頃を思い出させる品々が展示されていた。給食の展示コーナーでは昔の給食が並んでおり、不味かった脱脂粉乳の味を思い出した。

特別展示場は1階で行われていた。リニューアル記念特別展として、6月23日から2ヶ月間限定で、「洋館 明治の夢と挑戦」と題して展示が行われていた。明治に入り、見よう見まねで作った和洋折衷の建物「擬洋風建築」の時代から、来日した外国人建築家の時代、さらに日本人の建築家が誕生していく時代へと流れ、国家を象徴する大建築や上流階級の華麗な邸宅建築へと発展していく様子が展示されている。中でもドイツ人による国会議事堂案や辰野金吾による東京駅の設計は印象的であった。

(写真4)



また、曾禰中條建築事務所による慶應義塾図書館旧館と、中を飾る和田英作によるステンドグラス原画は、下部の真ん中にはラテン語で Calamvs Gladio Fortior（ペンは剣よりも強し）と書かれており、図書館旧館を訪れるたびに目にする愛着のある図柄であった（写真4）。



(拡大写真) 慶應義塾大学公式ホームページより転載 出典：慶應義塾大学公式 HP「ステンドグラス 1995-2010」

(<https://www.keio.ac.jp/ja/about/public-relations/stainedglass-1995-2010/261/>) © 慶應義塾大学

小学生の夏休みの自由研究の題材をと考えて見学会を行ってきたが、外出が危険なほどの高温となってきたこと、インバウンドの増加により混雑が顕著になってきたこと、見学場所が東京に限られていることなども手伝って参加者が減少してきた。一応今回で本企画を中止とすることにしたい。これまでに参加を頂いた皆様に御礼申し上げます。